

南アルプス市立豊小学校前期自己評価書

令和3年10月1日（金）

1 前期自己評価の経過

- (1) 前期教職員自己評価及び児童対象アンケートの実施（7月）
- (2) 自己評価及びアンケート結果を基にした職員会議及び学年会議にて状況分析と改善方策の検討（8月23日）
- (3) 学校関係者評価委員による自己評価書の検討（10月1日）

2 学校評価の分析と改善方策

はじめに

今年度より、小中一貫教育推進のための取組として、学校評価の質問項目を統一し、1中学校4小学校が足並みを揃えて目指す児童生徒像の実現に向けた取組を進めている。昨年度と質問項目は変更されているが、豊小学校独自の質問項目を入れ、これまでの教育活動と比較しながら改善の示唆となるようにした。

〔1〕評価基準

全体傾向を把握するため、【A】【B】評価を肯定的評価とし、それらの合計が80%を超えている場合は『満足できる状態』と判断した。また、【C】【D】評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は、『改善の余地がある状態』と判断した。

〔2〕全体的な傾向

上記の評価基準からすると、教職員による自己評価では、すべて項目で【A】【B】評価の合計が90%以上の割合になっている。また、昨年出されている評価の平均値を比較すると18項目（昨年度と同等項目）中10項目において値が上がっていた。また、否定的評価に目を向けると、3項目においてのみ【C】評価の回答があるだけである。これらを総合的に判断すると、全体的に比較的良好な状況にあるといえることができる。

また、児童アンケートにおいては【A】【B】の合計が80%を超えている項目は、17項目中15項目あり、その内、12項目で90%以上の肯定的評価で、全体的には良好な結果が得られている。しかし、2つの項目「⑩わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」では、肯定的評価が73%、「⑬わたしは、本を読んでいる」については肯定的評価が79%と『改善の余地がある状態』であった。また、【C】【D】評価に焦点を当ててみると、その割合が比較的高かったのは、「⑥わたしは、無言清掃をしている。」「⑧わたしは、家の人に学校の様子を話している。」「⑯わたしは、早寝早起きをしている。」の3項目である。満足できる状態であると判断できるが、改善に向けた取り組みが必要な項目である。

〔3〕結果の考察

(1) 学校経営・組織について

教職員は、個々の能力や経験を生かして相互に協力・理解を図りながら組織的な取組を行うことにより、質の高い教育活動を目指している。校務分掌において、各自が任された業務に積極的に取り組むだけでなく、教職員間において、報告・連絡・相談に努め、協力的な取組を行っており、教職員全員が一丸となって学校教育目標の実現に向かって学校運営に参画しているといえる。また、個々の児童の抱える様々な問題や特別な支援を必要とする児童の増加に対しては、教職員間の意思疎通を図りながら組織的な対応を進めている。

本校の課題の1つである特別支援教育の充実を図るために、昨年度から、特別支援教育

コーディネーターを3人体制としている。「通常学級在籍担当」「不登校担当」「特別支援学級在籍担当」の3人の教職員のコーディネートにより、校内支援委員会やケース会議を開催し、情報共有と指導・支援内容の相談・確認を行っている。個々のニーズに応じた指導や支援ができるよう、積極的に関係機関とも連携を図りながら対応してきている。

(2) 学習指導について

本校では、確かな学力を身につけた子どもを育てるために「豊小学校学びプラン」を作成し、学習規律や学習習慣の定着に取り組んでいる。また、児童間の関わり合いを基盤とし、学習プロセスや言語活動を重視した授業展開によって、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、学習指導要領で示される資質・能力の育成に取り組んでいる。

自己評価の結果から、本校職員は、授業を大切に考え児童に内容の理解が深まるように努めていることがわかる。県で進めている「山梨スタンダード」はもとより、本校の授業の進め方を重視した取組の成果が結果に表れている。「学習のめあて」を持たせることで見通しをもった学習活動を進め、授業後に振り返りを行うことで学習内容を確認し定着させるという一連の学習の流れが、どの学年でも行われ、自ら学びに向かう姿勢を育てると想像できる。今後も継続した取組を行い、自ら学ぶ力を育成できるようにしたいと考える。

児童の回答を見てみると、「⑨わたしは、学校の授業がわかる。」では93%の児童が日々の学習を理解している様子がわかる。これは「⑩わたしは、自分の考えをもって、他の人の話を聞いている。」(97%)の結果から、「聞くこと」が学習理解に繋がっているとも考えられる。「⑪わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」、「⑬わたしは、本を読んでいる。」をみると取組の成果が十分に表れていない点が見られる。これまでの取組の継続しつつ、指導方法を工夫していくことが大切である。

今年度からGIGAスクール構想のもと、南アルプス市でも一人一台の学習用パソコンの利用が始まった。「あなたは、教材・教具（ICT機器を含む）を効果的に活用する授業を行っていますか。」については昨年よりも平均値が上がっている。端末の活用方法を校内研究会において研修を行ったり、放課後に活用方法を互いに教え合ったりすることで、教師の使用頻度も上がってきている。2学期にまん延防止等重点処置がとられた際には、1学級を2教室に分けて、リモートで分割授業を行うなど効果的な利用が図ることができた。9月から、自宅に学習用パソコンを持ち帰り、課題に取り組む活動も始まった。効果的な活用方法については、今後も研修を深めていく。

(3) 生徒指導・生活指導について

生徒指導を充実させていくには、日頃から学級・学年経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係や児童相互の好ましい人間関係を育てることが大切である。

本校では、適切な児童理解と児童間の人間関係づくり（「Simple」プログラム）によって、個々の児童の「心の居場所」づくりと自己肯定感を高める指導の充実を図っている。児童数の変化で1学級当たりの人数が多い学年もあるが、「児童理解のためにコミュニケーションを図っている」や「諸問題の早期発見・早期対応に努めている」「特別支援教育理念を理解し、個に応じた関わりをしている」において良好な結果が見られる。児童アンケートでも「学校が楽しい」「困ったことがあったら相談できる友達がいる」「困ったことがあったら相談できる先生がいる」において肯定的評価の割合が高くなっている。

しかしながら、「相談できる友達や先生の存在」について「いない」と回答している児童がいることを見逃してはならない。学習面や生活面で取り残されることがないように、より一層の児童理解や諸問題の早期発見早期対応に努めていく必要がある。

携帯電話について行った児童アンケートでは、「自分の携帯電話・スマートフォンを持っている。」児童は学校全体では38%であった。所有率を学年別にみると、1年生：

36%，2年生：18%，3年生：24%，4年生：34%，5年生：50%，6年生：65%と学年が上がるにつれて所有率が高くなり、高学年では半数以上が持っていた。所有している中で、ルールが決められている割合は76%であり、児童任せにしてしまっている家庭が約24%と4分の1であった。1学期には5学年が「スマホSNS出前授業」を授業参観として行った。携帯電話・スマートフォンについての指導は、それらにかかわる問題の未然防止として、所有率が高くなり始める中学年を目途に道徳の授業と絡めて計画的にすることが望ましいと考えられる。また、家庭への啓発活動も必要であろう。今年度一人一台端末が整備されたことから、全児童が情報端末に触れる機会が格段に増えてきている。情報端末を扱えるようにして、これからの社会を生き抜く力を育むことと同時に、トラブルに巻き込まれたり、加害者となったりしないようにするため、情報モラル教育は必須であり、教職員は指導力を高めていく必要がある。

楡形スタンダードの項目に掲げている内容について児童アンケートの結果を見ると、「⑦わたしは、げた箱のくつをそろえている。」、「⑭わたしは自分からあいさつをしている。」について、肯定的評価が90%を超えている。児童会活動の一つである「明るく元気な豊の子活動」での「あいさつ運動」や「ルールを守る豊の子活動」での「ピタッとシューズ大作戦」の取組、学級で設けた係でのげた箱点検など、子どもたちを主体とした取組を仕組んできた成果である。しかし、「⑥わたしは無言清掃をしている。」「⑮わたしは早寝早起きをしている。」においては、肯定的評価が80%を超えているが、児童会活動での取組や家庭への啓発活動など継続していく。

(4) 保護者・地域との連携について

本校では、養蚕指導、切子指導、水泳指導、合唱指導、学習支援等において、地域住民や学校関係者の支援を受けてきた。また、早朝作業（愛校作業）や運動会への協力など、保護者の力を借り、教育活動を行ってきている。

しかし、今年度も昨年度同様に、新型コロナウイルス感染症の影響により、支援を受けづらく、充実した教育活動の機会が失われてしまっている。自己評価の「地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っている」については【C】評価があり、平均値も低くなっていた。

登下校の見守りや伝統的な文化活動等、地域住民や保護者の協力なしでは実現できないことがあり、これまでの教育活動を支えてもらってきた。「新しい生活様式」を踏まえながら、できる活動を増やしていったり、感染状況が良くなった折にはこれまでのような活動が行えたりするよう、協力、連携を呼び掛けていく。

(5) 小中一貫教育について

令和4年度から正式に“楡形中学校区小中一貫校”として楡形地区の小中学校がスタートを迎える。この取組については、3年ほど前から徐々に始まり、少しずつ形が出来上がってきている。それぞれの学校が特色を生かしながらも一貫校として共通の理解を図りながら、児童生徒を育成することをねらいとしている。今回の学校評価における評価項目の統一も、その流れで行われている。

「対話を意識した学び合いを授業に取り入れている」についての評価は、他の項目に比べ低くなっている。「学習指導」で触れたが、児童アンケートの「授業中に自分の考えを伝えている。」の項目が『改善の余地がある』結果だったことと関わりがあると考えられる。感染症対策であったり、教室内の人数の多さであったりの影響でグループでの話し合いを仕組むことが難しくなっていることが要因の一つであろう。楡形中学校区における小中一貫教育では、教科等横断的な視点に立った資質・能力として「対話力」に重点を置き、発達段階に応じた「対話力」の具現化とその育成を進めている。「新しい生活様式」も踏まえ、これらからの「対話を意識した学び合い」について研究し、授業改善に取り組

んでいきたい。

(6) その他

「⑭民主的で規律ある学級（学年・学校）集団作りを行っている。」「⑮諸表簿や文書、記録媒体を適切に管理・活用している。」の項目については、共通項目になかったが、意識したい大切な事柄として豊小学校の独自項目に挙げた。2項目とも昨年度よりも平均値が上がっていた。

豊小学校の全体計画の中に「育む＝しなやかな心を育む教育活動の充実」と「高める＝個々の力を高める特別支援教育の推進」がある。具体的な項目の「相互に認め合う学級集団づくり」や「個々のニーズに応じた指導の工夫」を意識した取組を進めている。また、全体計画の「調える＝保護者や地域から信頼される教育環境の整備」の中の「児童とふれ合う時間の確保」にも努めている。

校内研究会では、柱の一つに「学級力向上プロジェクト」の取組を掲げた。これは、目標達成力、対話想像力、協調維持力、安心実現力、そして規律遵守力からなる学級力を高めるために、学級力アンケートで自分達の学級の様子を自己診断・自己評価し、毎日の学習や遊びの中で意図的・計画的に取り組む実践的な仲間づくりの活動である。1学期に行った各学級のアンケート結果は校内研究会の中で共有し、それぞれの学級が2学期に取り組んでいく内容を確認した。

「⑭日ごろから様々な方法でコミュニケーションを図っている。」、「⑮諸問題の早期発見・早期対応に努めている。」「⑯個に応じた関わりをしている。」、「⑭民主的で規律ある学級づくりを行っている。」の肯定的評価が高いのは、豊小学校の教職員が児童一人ひとりを大切に、めざす教師の姿である「子どもに深い愛情をもつ教職員」として日々の実践に臨んでいる成果と考える。

これからも「信頼と笑顔、創意工夫して未来をつくる教師」として「たくましく 心豊かな 子どもの育成」を目指し教育活動に取り組んでいきたい。